

第 1675 回（4 月 23 日）

## 地域農業のシステム論的考察

江 川 章

本研究では、地域農業を人的・物的要素の相互作用のもとで重層化しているシステムとしてとらえ、そのとらえ方をシステム論を用いて提示することを目的とする。ここでは、特に土地利用型農業に重点をおいた地域農業のシステム論的組織観による考察を行った。

従来の地域農業研究では、個別経営における内部要素の結合関係の分析を地域スケールに拡大し、地域農業を一つの経営体としてみることに重点がおかれた。しかし、現在の消費動向の多様化、環境問題の高まりにみられるような外的環境にいかに対応していくかという点で、従来の「経営体」的「地域内農業問題」での分析は限界がみられる。ここでは、地域農業を環境との相互作用のもとで組織の目的や行動様式の改変を行うシステム、すなわち、動態的システムとして取り扱うことが必要であるという認識から、システム論の視点によって地域農業組織の検討を行った。

システム論は、機械論と有機体論との調和を目指し、個から全体への連続的な発展、全体の諸要素への非還元性をシステム概念（①個と全体の調和的発展、②階層性、③自己安定性、④自己組織性）によって統一的に把握するものである。

このシステム論の人的事象への適用とその理論的展開は、C. I. バーナード以降の近代組織論にみることができ、システム概念に基づいたそのとらえ方（システム論的組織観）は以下の通りである。

第 1 に、2 人以上の人々の意識的な調整によって関連づけられた要素（共通目的、貢献意欲、コミュニケーション）を組織＝システムとし、組織における個人と全体の調和的発展を目指す。

第 2 に、組織を構成 3 要素（貢献意欲をも

った人間、コミュニケーション、組織の共通目的）によってとらえ、有機的関連をもった階層的秩序として位置づける。

第 3 に、能率と有効性の問題を取り扱う組織均衡論をシステムの自己安定性としてとらえる。

第 4 に、組織が自らの構造を改変して環境に対応する組織革新をシステムにおける自己組織性として位置づける。

以上のように、システム論的組織観は、個人と組織全体の調和的発展を基礎とし、対象に階層性、組織均衡、組織革新を見出そうとするものである。この考え方によって地域農業を考察した場合の重要な点は以下の通りである。

- (1) 階層性に関しては、構成員に共通目的を達成させるように、権限に基づいたコミュニケーション・システムをいかに構築するかが重要な視点となる。特に、階層構造の中枢に位置する管理主体のあり方が地域農業システムの発展にとっては重要な役割を果たす。
- (2) 組織均衡に関してみると、対外的均衡における社会的効用の創出、対内的均衡における企業的方法とムラ的方法の調和が重要な視点となる。
- (3) 組織革新に関しては、システムの構成員に主体性を認め、多様な価値観が組織に反映するような管理体制の構築が必要となる。このことは、システムの思考的前提である個人と全体の調和的発展につながるものである。

以上の観点から地域農業をとらえ、さらに地域農業の管理指標を取り出すことができれば、地域農業の再編・振興はリーダーの存否という問題に対応できると考えられる。